

令和二年二月二日、日本最東端に正倫理法人会の活動拠点が生み出されました。北海道釧路市倫理法人会です。厳冬期はマイナス二十度に達し、一番近い倫理法人会の活動拠点の帯広市までは百キロを超え、札幌市内までは車で4時間以上かかる距離に位置しています。

釧路市倫理法人会の初代会長に就任したのは、地元で設計事務所を経営している橋川昌弘氏でした。一見おっとりした雰囲気、会長ですが、内に秘めた心の強さがあり、掲げた目標に向かって坦々と突き進むその姿勢は、多くの仲間から信頼と支援を得ることに繋がりました。

毎週二時間以上かけて帯広市から応援が入り、さらには宿泊を伴って、札幌市内から支援の手が差し向けられました。

多くの倫友の心を突き動かした、橋川氏の行動力と心の強さはどこからくるのかを探ってみると出生にまで遡るようです。

出産予定日を一カ月前に控えた昭和五十年七月、母親に悪性の腫瘍が発見されました。医師からは、一刻も早く手術をしなければ、母子ともに命の保証はないと告げられます。すぐに摘出手術と出産が同時に行なわれました。そして、医師の懸命な努力の結果、無事に手術は成功したのです。ただし産まれてきた子供は超未熟児で、身体的な障害を伴うことになったのです。

体重は千六百グラムで、心臓に障害を抱え、視力は殆んどない状態でした……小学生になると、サッカーに興味を覚えるように



## 奇蹟は起きるのではなく、起こすもの

なりました。当時通学していた小学校ではサッカーが盛んで、友達とプレイするのが楽しみでした。しかし、篤いレンズの眼鏡をかけても、足元のボールがよく見え、走ればすぐに息が切れて、百メートルも走る事ができませんでした。

友達からは、からかわれ悔しい思いを募らせる日々の中で、(普通の生活がしたい。必ずいつか、みんなとサッカーができるようになる)と、強く心に決めたのです。

その後、命をかけて生んでくれたお母さんに悲しい思いをさせたくない一心で、独自の眼筋トレーニングを行なったのです。

運動会の時でした。眼鏡をはずして臨んだ競技で、周りがよく見えたのです。眼鏡をかけている時よりも遠くが見え、喜びが全身を貫きました。これを機に視力は奇跡的に回復していきました。相乗効果的に体力もついていったのです。

現在、橋川氏の視力は裸眼で2・0。ホルルマラソンを悠々と完走できる体力の持ち主です。この幼少体験から氏は、「何事も心に決めさえすれば、どんなに苦しいことでも、必ず乗り越えられる時がきます。一度始めたことをやり続けければ、道は拓けることを実感しています」と語ります。

『万人幸福の栞』第三条には以下のように書かれています。

運命を切り開くは己である。境遇をつくるも亦(また)自分である。己が一切である。努力がすべてである。やれば出来る。